

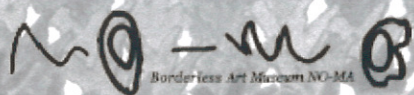
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

ニュースレター 9号

発行 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

住所 滋賀県近江八幡市永原町上16

発行日 2010年1月25日



松本寛庸「乱舞・・・魚」

ただいま開催中の企画展

この世界とのつながりかた Touch The World

2009年10月24日(土) - 2010年3月7日(日)

会場 ポーダレス・アートミュージアムNO-MA+尾賀商店
開館時間 10:00~17:00 休館日 月曜日(ただし祝祭日は開館し、翌日閉館)
観覧料 一般500円 高大生450円 中学生以下は無料
企画 保坂健二郎(東京国立近代美術館研究員)

助成:  日本財団
The Nippon Foundation



撮影者: 木奥恵三

出展作家

秋葉シスイ 奥村雄樹 川内倫子 仲澄子 橋口浩幸
松尾吉人 松本寛庸 森田浩彰

日時: 10月24日(土) 15:00~16:00
川内倫子(出展作家)



日時: 12月19日(土) 13:30~15:00
奥村雄樹(出展作家) 森田浩彰(出展作家)
保坂健二郎(本展キュレーター)



これまでのイベントレポート!

「Cui Cuiについて」

「この世界とのつながりかた」のオープニングに、出展作家8名の内の6名と、そのご家族がNO-MAと尾賀商店に集まりました。オープニングに合わせた川内倫子さんのトークイベントは作品の「Cui Cui」が映される会場内に約60名以上のお客様が集まりました。

「このタイトルはキュイキュイと発音し、フランス語で雀の鳴き声のことを指します。雀の鳴き声というものは世界中どこでも聞けるもの。私の家族の写真は、どこの世界にもある普通の家族。小さな鳥のさえずりにすぎないことですが、でもそれに対して見直していくことで、次に暮らしていこうという気持ちになります。」と、川内さんの作品に向かう思いにみんなが耳を傾けていました。

「なぜ身の回りのものなのか」

定員30名を上回る盛況の中、トークイベント「なぜ身の回りのものなのか」がスタートしました。保坂さん司会の元、奥村さんと森田さん、お二人がそれぞれご自身の作品を紹介すると共に、気になっている作品も紹介してくださいました。

そのなかで、すでに使用する用途や意味が定まっている身の回りの物や日用品を、あえて違う取扱いをすることで、実際は「知らないモノ」になるという面白さがあるという話や、例えばアルミニウムを丸めたモノを美術と呼んでいいのか、それを美術とするならば、どこからが美術でどこからが美術ではないのかなど、取扱いにくいテーマでありながら、興味深いトークが繰り広げられました。会場からも質問がいくつか飛び出し、終了予定を約30分オーバーする大変内容の濃いイベントとなりました。



「作者と作品における内面/外面」

日時: 11月15日(日) 13:30~14:30 諏訪哲史(小説家)

保坂 本日は、作家の諏訪哲史さんにお越しいただき、この展覧会というよりは「人間の内面と外面」という問題について、多少哲学的に傾きつつお話していただきたく思います。人間が生活していく上で言葉が重要な駆動力になるということ。それを主要なモチーフにして創作活動をされている諏訪さんに、僕はぜひお話を聞きたいと思っていました。今日は会場には、美術関係者や文学関係の方々もかなりおられますね。ではよろしくお願いします。

諏訪 実は「ロンバルディア遠景」を書く時には、「アサッテの人」の聴覚的なテーマから離れて、視覚的、しかも触覚的な領域まで書ければと思っていました。「ロンバルディア遠景」でもっとも繰り返されるモチーフが、本展で試みられている保坂さんのコンセプトでもある「内面と外面の相克」というテーマだったのです。ネタバレにならない程度に話すと、井崎という詩の編集をやっている男がいて、彼が18歳の篤という新人の少年詩人を見つける。非常に美しい青年で、井崎は篤に対して一種の同性愛的な欲望を抱きつつ詩人としての才能を買ってデビューさせる。しかし篤はある時イタリアに旅立ってしまい、イタリアから詩のような日記のようなものを井崎に送ってくる。その井崎が篤という美少年をずっと観察して書き綴ったような小説なんです。

まずここにあるのは、書いている人間(井崎)と書かれている人間(篤)が一つの小説の中で同居している状況です。どちらが主体なのか、つまり書く者と書かれる者が不決定になることを僕は小説で表現したかった。

それともう一つは、「ロンバルディア遠景」という本は、最後には閉じていきます。箱の中に、一つの箱の中に作者と読者と登場人物の三者が姿を消して去っていき、そして蓋が閉じられるというイメージで終わっています。僕は昔から小説は一つの箱だと思っています。箱というものは中に閉域を作って閉じられるものです。この作品の小説世界は、一つの箱を開けた時から始まり、その読者が最後のページをめくっていった本は閉じられます。そのときに作者の死が訪れて登場人物の死が訪れる。そして僕がこれを一番言いたかったんですけど、読者の死さえもそこで用意されている。そういう小説にしたかったんです。1950~60年代、ロラン・バルトをはじめとした記号論の学者たちが盛んに作者の死を唱えていた。つまり読む人間によって本は書かれるという思想がでてくるんですね。それがテキスト論です。100人の人が「ロンバルディア遠景」を読んだら、「ロンバ

ルディア遠景」の作者は100人になるという考え方。あるところまでは僕は全く賛成なのですが、読者が神の位置になるということには疑問を持っています。僕は読者は「ロンバルディア遠景」の読後感を携えて、その箱のなかに閉じ込められていったと思うんです。小説を読み終えた読者は神様のように小説世界を一元的な視座で本の外から見ることはできない。ですから作者も読者も登場人物でさえも絶対者ではない。相対の中に生かされている脆弱な存在。そういったことを小説の中に入れることによって偏りをなくしていきたいと思ったのです。

内と外という箱のイメージはもう一つ皮膚というイメージを生み出しました。皮膚にこだわるのは、まず一つ僕が子供の頃から今もって病的に持つ感覚。例えばツツツの壁面とか毛穴とかそういった形象に弱い。吐き気を催すんですね。今日見せていただいた作品の中にも、細かいことをひたすら反復するオブセッションを持っている作者たちがたくさんいましたが、小説を書く前、そういう自分の中の皮膚感覚をとっかかりに「ロンバルディア遠景」を書けたらいいなと思ったところがあります。皮膚というのは自己と他者との境界で、自分の表面である。でも表面のその下、そして内奥は自分ではない。

例えば真理という抽象的な言葉がありますが、真理の真理たる存在証明みたいなものにはニーチェの「真理は外皮・ペールそのものにある」という考え方で、それがサルトルの実存主義の萌芽になっている。最近では市橋容疑者が2年7か月間顔を整形をしながら逃げ続けていましたけれども、捕まって実家のお父さんが出てきて、「あのこは本当はいい子だ」と。なぜこういふたとえ話をしたかという、本当は善人だ、でもその善人が人を殺した。その人は善人か? この場合、その人は悪人だというのがサルトルの回答になります。人間の中で最も深いものは皮膚であるといったのは、ヴァレリーという詩人ですが、皮膚というものが肉体でありながら、つまり自分でありながら外に開かれているということ。「ロンバルディア遠景」は、皮膚というものがどういふものなんだと考え尽くす人間たちの物語になっているんですね。『生きとし生けるものはすべて、顕微鏡で見る「細胞」という名の「点(ドット)」』でできている。

細胞をもっとも細かな顆粒にすれば原子(アトム)となり、この形而上の最小単位から、形而上の領域に片足を踏み入れたものが単子(モノイド)と呼ばれる。

この世のすべては点だ。点、点、点。
スーラの点描も、リキテンシュタインのリトグラフも、今や世界中が覗き込んでいる液晶画面の粒子に至るまで、すべてこの世は



爾(しか)く絶対的な点の集合、その全体であって、結局のところ、我々は点をしか眼にできず、また点にしか触れ得ないのである。これは、ハイデッガーの哲学を僕流に咀嚼し、僕の持論のようにして書いたものです。現代の視覚媒体はすべて点です。結局外面と目に見える視覚というものがそういった粒子の差異だけでいかにようにもできる。外面が見る者の内面を支配するというのが今の時代だと思えます。内面と内面で通じ合えるみたいな現象を抱きがちなんですけれども、そうではなくて実は、自分の眼球という表面と液晶画面という表面がお見合いしているだけなんです。

僕自身もこの世の外側で神様みたいな人に、筋書きを書かれています通りに生かされているような。つまり諏訪哲史が誰かに書かれているという妄想をいつも抱いていて、ずっと治らないんです。僕の強迫観念です。僕という存在を認めるために、僕の外にもう一人の僕という箱を作る。すると、今度はその外箱である諏訪哲史は誰によって諏訪哲史だと証明されますか? それを証明する人が必要でしょう。だから、その諏訪哲史を証明するための、またもう一人別の諏訪哲史がさらに外に出来る。これらはすべて幾重もの箱なんです。そしてまた逸脱しようとして。外へ外へ。無限増殖している箱の中の自分は、そうやって絶対に本当の「外」には至らない。そういう一種の永久運動というか終わりのないことを思考しているんですね。内と外を考えると、このように自分と世界について考えざるを得ない。その境界にあるのが皮膚です。表面です。視覚芸術のすごさはこういったところにあります。そして、それを先鋭的に表現することができる人というのは、常人には及ばないような一種の「病」を背負った人々なのです。僕も文学という表現世界の中で、彼らアル・プリユットの芸術家と同じ、どこまでも「病」の作家である、そう思っているのです。

下記トークイベントは、まだまだ予約受付中です!

●2010年2月6日(土) 14:00~15:00

「本展について」 保坂健二郎

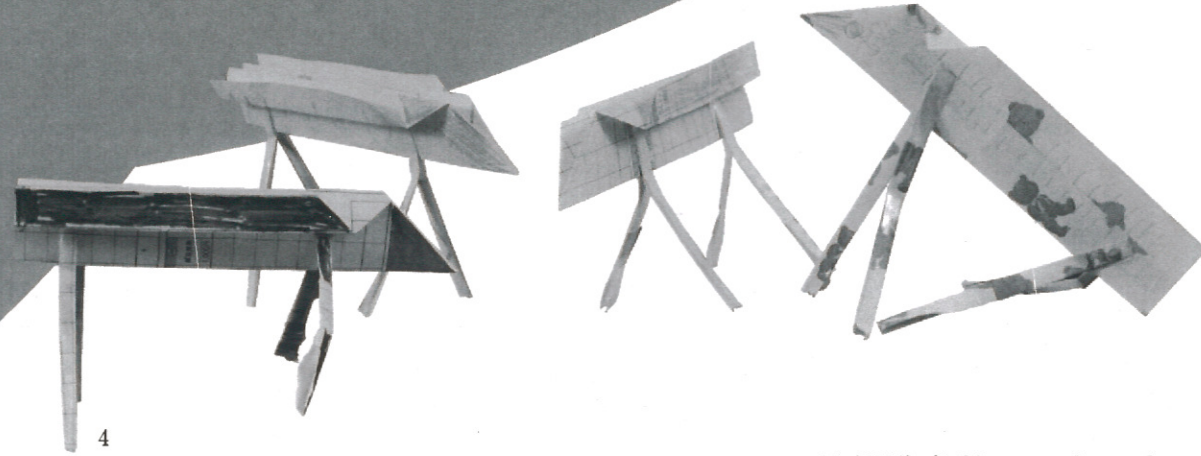
(ポーダレス・アートミュージアムNO-MA、尾賀商店)
定員:20名

※参加無料、要観覧券・要予約
※定員になり次第、締め切らせていただきます。

第6回滋賀県施設合同企画展

ing

障害のある人の進行形

2009年
9月5日(土) - 10月12日(月)主催：第6回滋賀県施設合同企画展実行委員会
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

中野裕太

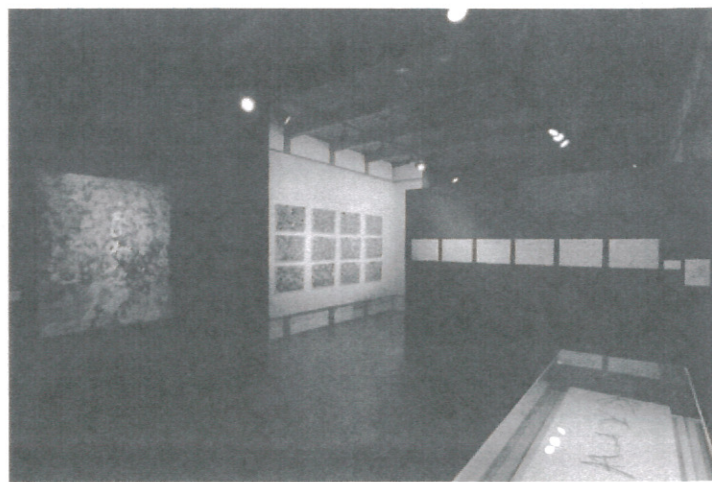
8名の制作風景映像を会場内で流した新たな試みには「映像をとおり作者と作品をより近くに感じた」との観覧者の声を多く聞くことが出来ました。

オープニングイベントでは、出展者9名と造形担当者の方が、新聞等取材6社も含め、総勢33名の観客の前で作品解説をされました。

最終日に行われたクロージングイベントではガムラン奏者HANA★JOSSさんのお二人を迎え、演者手作りの素晴らしい影絵とコンサートをNO-MA2階の畳の間で開催。細かい装飾が施された影絵人形の操りに、出展者や子供さんが挑戦される等、観覧者、アーティスト約60名の交流の場を持つことが出来ました。

今年で6回目を迎え、参加の21施設から、作家24名の方の陶芸・絵画・織り・ポエム・作曲など「その人らしさ」が存分に発揮されている表現に焦点をあてた約300点の作品を展示しました。

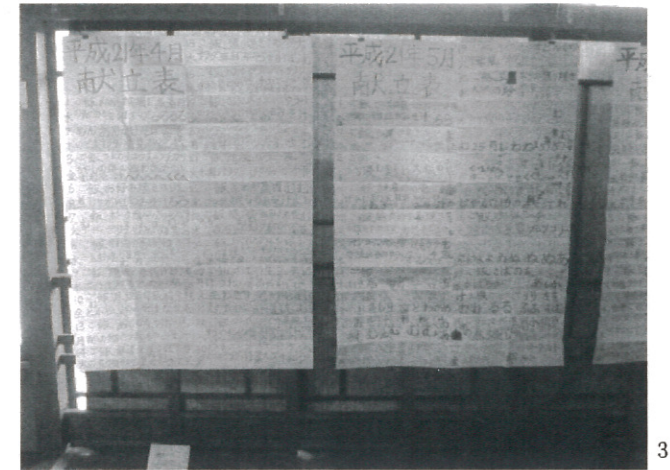
飯塚政暁氏の針金で作られた人型のような半立体作品、内藤薫氏の毎月の昼食の献立をオリジナル様式で大きく清書された献立表、橋本志げの氏の色とりどりの力強い油絵、三木いづみ氏の5mmほどの陶の粒々、観覧者の方のアンケートにも反響が大きかった山本和彦氏のポエムには「ストレートな言葉に涙が出た」と感想をいただきました。



1



2

3
内藤薫クロージングイベント
HANA★JOSSさんの影絵

総観覧者数1729名の方にお越し頂き、授業の一環として小学生や、社会福祉協議会研修、文化センター主催の見学会など団体の方々に観て頂くことができました。アンケートの回答も大変多く、島根、広島、和歌山等、県外の施設関係者から「自分たちもこのような展覧会を是非したい」とingの取り組み自体へのお問い合わせやご質問が多数寄せられたのも今年の特徴でした。

また、第1回糸賀一雄記念奨励賞団体の部を、この展覧会の企画である、滋賀県施設合同企画展実行委員会が受賞し、11月19日、実行委員長木村学氏が受賞式に代表で出席し、嘉田滋賀県知事より表彰されました。

参加施設

滋賀県立近江学園
唐崎やよい作業所
クリエートプラザ東近江
湖北まこも
坂本ホーム
さくらはうす
信楽青年寮
社会就労センターあおぞら
社会就労センターこだま
障害者支援事業所いきいき

障害者福祉サービス事業所おおぎの里
なんぶでいセンター
八身福祉会
パンパン
彦根学園
蛍の里
もみじ寮・あざみ寮
やまなみ工房
あおはにの家/萌あおはに
万葉荘園あおば寮

助成：日本財団
The Nippon Foundation

大辻良介

アウトサイダーアート展 ～パリ展に行く作家達～

2010年2月5日(金)～7日(日) 大津プリンスホテル コンベンションホール淡海2F
 5日12:00～24:00 6日9:00～24:00 7日9:00～11:00
 観覧のみ500円 ガラリートーク(展示観覧料込)5日1500円(一日通し) 6日2000円(一日通し)

アール・ブリュット・ジャポネ展を少しでも多くの方に知っていただきたく、プレ展覧会を2月5日(金)～7日(日)、大津プリンスホテル(滋賀県大津市)で開催します。

今回展示するのは、出展作家63人のうち33人の作品です。この展覧会のために、新たに作品を出展いただきます。

展覧会場では同時に、さまざまな立場、角度からアール・ブリュット・ジャポネ展を取り上げたガラリートークも行います。

初日には、アウトサイダーアートの国内の現状について、当館のはたよしこアートディレクターが講演します。また、国外の現状として、台北市立教育大学の蘇振明教授に台湾の現状についてお話しいたします。

作家と日頃関わる立場からは、全国から彼らを支援する20施設・病院のスタッフがトークセッションを行うほか、幼い頃から作家を見守ってきた家族も登壇します。どのような環境で作家たちは制作しているのか、施設のスタッフや家族は、この出来事をどう捉えているのかじっくり聞く貴重な機会です。

2日目には、彼らの作品を、当然の美術品として捉えた時、自ずと想定される事柄について知るために、東京国立近代美術館の保坂健二朗研究員、著作権専門の中久保満昭弁護士、ギャラリスト小山登美夫氏から講演いただきます。

このほか田島征三氏と奈良美智氏の鼎談という二人のアーティストの豪華競演も必聴です。

アウトサイダーアートの深部へどんどん迫る3日間、是非体感してください。



ART BRUT JAPONAIS アール・ブリュット・ジャポネ展

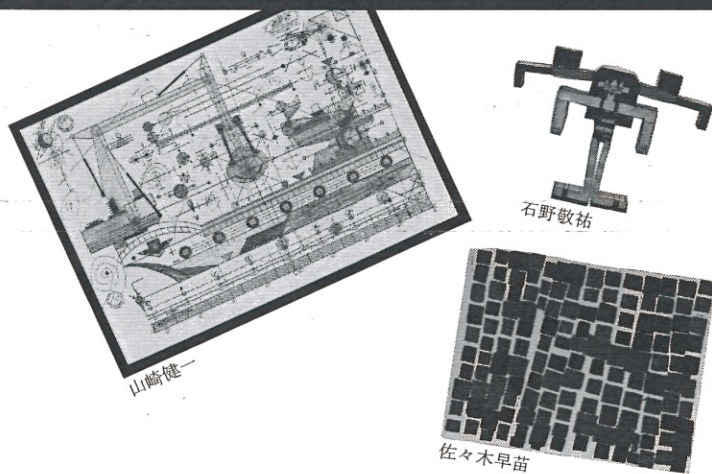
2010年3月、パリ市立アル・サン・ピエール美術館において「ART BRUT JAPONAIS(アール・ブリュット・ジャポネ展)」が開催されます。出展するのは全国20都道府県の作家63人、作品点数は約900点。

この展覧会のきっかけは2008年に開催された、アール・ブリュット・コレクションでの「JAPON(ジャポン展)」に遡ります。ジャポン展は会期を延長するほど盛況で、各地から多くの観客が訪れましたが、その観客の一人にパリ市立アル・サン・ピエール美術館のマルティヌ館長がいらっしゃいました。ジャポン展を観て、日本人作家の作品の素晴らしさに魅了された館長からの要請で、今回の展覧会開催が決定したのです。館長は2009年5月に来日し、全国から滋賀県に集められた作品に目を通し、自らの目で作品を選ばれました。

この展覧会に合わせた鑑賞ツアーも企画されています。

【パリ市立アル・サン・ピエール美術館】

1868年に建設され19世紀の金属建築の美しいサンプルの一つとして知られる市場を、1986年に美術館に変更、オープンしたパリ市立の美術館。「芸術の都 パリ」の中でもとりわけさまざまなアーティストが集まることで知られるモンマルトルの丘の麓に位置する。現代のポップ・アート、ワイルド・アート、アウトサイダー・アート、奇抜なアートを積極的に取り上げ、美術界に常に問題提起している。



開催場所: HALLE SAINT PIERRE(アル・サン・ピエール)

開催期間: 2010年3月24日～2011年1月上旬

公式ホームページ: <http://www.art-brut.jp>



ボーダレス・アートミュージアムNO-MA地域交流事業

八幡山に天狗を探せ!

ボーダレス・アートミュージアムNO-MAでは、2007年より近隣住民や近隣学区の人たちに向けて地域交流プログラムを行ってきました。今年度は「八幡山」をベースとし、「八幡山に天狗を探せ!」というテーマのプログラムを2009年8月～2010年3月までの4回の季節を通した1年プロジェクトで行っています。

毎回、企画協力として、近江兄弟社小学校教諭の鳥井新平さんや、京都のランドスケープデザイナー河合嗣雄さんといった、近江八幡をこよなく愛する人たちにお願いしています。今年もお二人に加え、近江八幡に住む地域の方々や、特に八幡山の景観を守る会の皆様に協力をお願いし、プロジェクトを進めてきました。

そんな八幡山を舞台にした、1年間にわたる壮大な天狗探しも、残すところ、あと1回。最後は3月、NO-MAで1週間にわたってこれまでの成果を展示発表する予定です。(明細は7pの展覧会・イベント案内をご覧ください。)

これまでの活動報告

第一条・夏 「天狗の住処」の巻

日時: 2009年8月30日(日) 8:00～12:00

場所: 八幡公園・その周辺

語り手: 小暮宜雄(京都橘大学教授)

地域交流事業「八幡山に天狗を探せ!」の記念すべき第一回目の企画「天狗の住処」の巻が行われました。今回の企画は、八幡山に住む天狗をイメージしながら5つのグループで「天狗の住処を作る」こと。各班で話し合い、「住処」を限られた道具と、八幡山の竹だけで作りあげました。八幡公園に突如として出現した5つの住処には、そこに住む天狗の名前が付けられ、最後には皆で作った住処の周りで小暮宜雄さんの天狗のお話を聞きました。



第二条・秋 「天狗絵巻」の巻

日時: 2009年10月18日(日) 10:30～12:00(希望者のみ) / 13:00～16:00

場所: 八幡公園・近江八幡市立図書館2階視聴覚室

「天狗絵巻」は紅葉が始まりだした秋の八幡山から行われました。あらためて天狗や秋の八幡山を感じる目的も兼ねて、希望者のみ午前中から八幡山散策を行いました。本番は、前回のグループごとに分かれて一枚の大きな和紙に向かい、グループで話し合ったストーリーで絵を描いていきました。5枚の絵巻物は実に様々なストーリー展開で描かれました。



第三条・冬 「天狗の紙芝居」の巻

日時: 2009年12月20日(日) 13:00～16:00

場所: 近江八幡市立図書館2階視聴覚室

語り手: 林加奈(音楽家・画家・紙芝居師)

2009年最後の「八幡山に天狗を探せ!」は京都から紙芝居師の林加奈さんをお招きして、前回描いた「天狗絵巻」を元に「天狗の紙芝居」を作りました。林さんの紙芝居を観るのかと思いきや、参加者はキャスト班、音楽班、美術班、広報班と4つのグループに分かれ「天狗の紙芝居」の練習や打ち合わせを行いました。考えたり、踊ったり、楽器を鳴らしたりと、ハードなりに楽しい1日となりました。この日作った「天狗の紙芝居」は3月の大天狗展で上演します。



展覧会・イベント案内

地域交流事業「八幡山に天狗を探せ！」

「大天狗」展

日時 2010年3月13日（土）～3月21日（日）10:00～17:00

月曜休館・入場無料

会場 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

「八幡山に天狗を探せ！」のこれまでの企画で作上げた全てのもの、第一条に作った「住処」の再現展示や「紙芝居」、それぞれの記録写真と映像など発表展示します。会期中の3月14日には、冬の企画の語り部林加奈さんが再登場！みんなで作り上げた「天狗の紙芝居」を参加者全員で上演する予定です。是非春は、八幡山の天狗を見にNO-MAにいらっしやっ下さい。

関連イベント

日時 2010年3月14日（日）14:00～

会場 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

定員 30名（要予約・保護者含む）

対象 第一条から第三条まで参加されたみなさん・どなたでも参加可能（年齢制限などはなし）

語り部 林加奈さん（音楽家・画家・紙芝居師）

内容 冬の企画で作上げた「天狗の紙芝居」を林加奈さんと参加者で上演します！

チカクニアルセカイ

—自分の感じる世界を表現したい！障がい者アートの現在—

日時 2010年1月23日（土）～2月21日（日）月曜休館・入場無料

会場 長野県伊那文化会館 展示ホール（長野県伊那市西町5776）10:00～17:00

長野県には、障害者施設のアートに関わるネットワークがあります。その活動を応援し活発化していくために、NO-MAと、長野県文化振興事業団が主催となる展覧会を開催します。タイトルの「チカクニアルセカイ」は、作者の内面的な世界にも近づけるようなアウトサイダー・アートの面白さを象徴して名づけています。

出品作家

白井昭夫（福）りんどう信濃会上田悠生寮 通所部なずな

島芳雄（福）かりがね福祉会 OIDEYO ハウス

月内祐樹 NPO 法人ぼけっと 喫茶ぼけっと

水谷伸郎 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

矢島慎一郎（福）かりがね福祉会風の工房

山崎健一 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

吉澤健 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

日本財団 助成事業
The Nippon Foundation

